卯月とファンの恋物語

水原渉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プロデューサー視点ではなく、ファンの立場からアイドルと仲良くなる物語。

名もなき1ファンとして卯月と親しくなりたい願望を持つすべての同士に捧げます。

※物語の趣旨に関わらず、直接的な性描写があるとＲ―１８だと多方面よりご指摘をいただきましたので、直接的な性描写のある話はＲ―１８タグで投稿します。

※Ｐｉｘｉｖから転載。

※『１』２０１６年４月１９日執筆。

目　次

卯月とファンの恋物語
1 ―― 1
2 ―― 11
3 ―― 18
4 ―― 24

卯月とファンの恋物語

1

卯月ちゃんを世界の誰よりも愛している。

卯月ちゃん――島村卯月はアイドルである。まだまだ駆け出しだが、プロダクションの力もあって、着々とライブをこなし、メディア露出も増えてきている。

俺はそんな卯月ちゃんを、デビュー当時から応援している。本当は養成所時代から気になっていたのだが、何か「俺はずっと前から知ってるぜ」自慢みたいに聞こえるので、誰にも言っていない。

もっと言うと、卯月ちゃんを好きなこと自体、人に話したことがない。ライブ会場やツイッターなどで、ファン同士の交流を羨ましく思うこともある。けれど、担当がどうのこうの言っている連中と同じ程度の愛だと思われたくなくて、一人で応援を続けている。

同じ担当同士だと、取り合いになるのではないかと思うのだが、彼らにとって卯月ちゃんは神みたいな存在で、信じるすべての民に等しく平等に存在しているのだろう。

それを理解はできる。むしろ、俺の方が間違っているのもわかっている。だからこそ誰にも言っていないというのもある。

俺は卯月ちゃんをもう少し身近に感じているし、感じたいと思っている。それはきっと、危険な発想なのだろう。部屋中にポスターを貼って、缶バッジをたくさんつけた法被を着ているオタクよりも、本気でアイドルとお近付きになれると思っている方が間違っている。

それはわかっているが、本当に駆け出しの、ただの女の子でしかなかった頃から知っていると、どうしても後からのファンよりも優位な気持ちになるし、自分を特別だと思ってしまう。良くないことだとわかっているが、誰にも迷惑をかけていないので許してほしい。

そんなわけで、ツイッターもやっていない。アカウントはあるが、アイドルの話題は一切しないし、もちろん卯月ちゃんのアカウントも

フォローしていない。鍵付きのリストに入れて眺めているだけだ。
きっと、ツイッターで気軽に話しかけているヤツらの方が、ファンとしては正しいのだろう。卯月ちゃんからリプをもらっているのを見て、羨ましく思わないでもない。落ち込むだけなので、最近は卯月ちゃんのホームは見ないようにしている。
俺は、卯月ちゃんがデビューした時からずっと、アナログの手紙を書き続けている。今時そんなことをしている人がいるのかと思うが、デビューが決まった時に出した手紙に返事をもらえて、あれ以来ずっと想いは文字か言葉で伝えようと決めている。
３回目の小さな会場のイベントで、握手会があった。まだファンも少なかったし、ＣＤもなかったので、何かグッズを買った人はもれなく握手できたのだが、それでも２０人いたかどうかだった。
その時にはもう、手紙を3通ほどもらっていたので、握手の時に「いつも手紙の返事、ありがとう」と伝えた。
名乗らなかったのも悪いのだが、卯月ちゃんは少しきょとんとしてから、恐る恐る「○○さんですか？」と聞いてきた。今思えば、違っていたらどうするつもりだったのか気になるが、その時はまさか自分が認知されているとは思わず、舞い上がってしまった。
「あっ、はい、そうです！」
「いつもお手紙ありがとうございます！　そっか。あなたが○○さんだったんですねー」
何やら嬉しそうににこにこする卯月ちゃんの顔を真っ直ぐ見るのが精いっぱいで、初めての握手の感触は全然覚えていなかった。卯月ちゃんの声で呼ばれた自分の名前が心地良くて、俺は完全に恋に落ちた。
それから卯月ちゃんは躍進して、ライブ会場はどんどん大きくなり、ステージとファンの距離は離れて行った。握手会のような、アイドルと直接触れ合える機会は減り、時間も短くなった。
心が折れることも多くなった。無名の子のおっかけが、有名になってファンを辞めるという話はよく聞くが、俺もこんなにツライ思いをするのなら、いっそこの世界から手を引こうと何度も考えた。

それでも、握手会のたびに卯月ちゃんは「〇〇さん」と呼んでくれたし、直筆の手紙は今でも続いている。たくさんもらっているだろうに、一体どれだけ返事に時間を割いているのだろう。卯月ちゃんのそういうところがやっぱり好きで、もらった手紙を見ては元気を出す毎日だった。

そんな卯月ちゃんを、街で見かけた。昼下がりのことだった。

首元がふんわりしたトップスにオレンジ色のカーディガン。ひらひらした黄色のスカートを春風になびかせて、小さなリュックを片方の肩からぶら下げていた。

「卯月ちゃん」

思わず声を出したのは、呼び止めるためではなかった。飛行機を見て、「あっ、飛行機」と呟くように、本当に反射的に卯月ちゃんの名前を呼んでから、体が震えた。

卯月ちゃんはふと足を止め、何気なく振り返った。そして俺を見てパッと顔を明るくする。

「〇〇さん！」

卯月ちゃんの唇から紡がれる自分の名前の響きがやっぱり綺麗で、俺は初めての握手会を思い出した。ほんの一瞬陶然としてから、慌てて表情を引き締めた。

「あっ、覚えていてくれてすごく嬉しいです！」

思わず姿勢を正すと、卯月ちゃんは少しだけ唇を尖らせて、上目遣いに俺を見上げた。

「当たり前じゃないですか。私、そんなに薄情に見えますか？」

「いや、全然！　だってほら、ファンは他にもたくさんいるし……」

しどろもどろになってそう言うと、卯月ちゃんは優しい眼差しで微笑んだ。

「〇〇さんは特別です」

俺はその言葉の意味を、ひとまず考えないことにした。それは卯月ちゃんと別れた後にじっくりと考えればいいことで、今はこの神が与えてくれた奇跡のような一瞬を、どう過ごすかが大事だった。

俺が次の一言を考えつくより先に、卯月ちゃんが口を開いた。

「〇〇さんも、よく私だってわかりましたね。私服で話しかけられたの、初めてです」
「どっからどう見ても卯月ちゃんだけど」
「でもほら、その場にいるって知ってないと、わからないことってないですか？」
「あるある。でもそれはむしろ俺の台詞だよ」
「ああ、なるほど。そうですね」
　卯月ちゃんは何やら一人で納得して、ふふっと笑った。その笑顔が可愛すぎて、俺はその場で昇天するところだった。
「〇〇さんは、今日はお買い物ですか？」
　にこにこしたまま、卯月ちゃんが言った。俺は自分からではなく、卯月ちゃんの方からこの時間を延ばしてくれたことに感謝した。
「電車の乗り換えついでに、ちょっと降りてみただけ」
「そうですか。〇〇さん、××線ですもんね」
　卯月ちゃんがさらっとそう言って、うんうん頷いた。そんな子供っぽい仕種がどうしようもなく可愛いのだが、それどころではなかった。一言も言っていないのに、卯月ちゃんの口から自分が××線という情報が飛び出したのがあまりにも予想外で、俺は思わず固まってしまった。
　それに気が付いたのか、卯月ちゃんは慌てたように手を振った。
「あっ、別にストーカーじゃないですよ！」
「いやいや、そんなこと思ってないから。どうして××線って？」
「どうしてって、いつもお手紙出してるじゃないですか」
　不思議そうに卯月ちゃんがそう言って、俺は思わず目を丸くした。今までずっと卯月ちゃんから手紙をもらっていながら、自分の家が知られていると考えたことがなかった。卯月ちゃんが、もらったファンレターに書かれた住所を、記号としてではなく、場所として認識しているとは思わなかった。
「そっか」
　俺が呟くと、卯月ちゃんは「そうですよー」と笑った。なんだか妙に恥ずかしくなったが、卯月ちゃんがずっと笑っていてくれるのが嬉

しかった。
「卯月ちゃんはお買い物？」
「そうですね」
「何かいいものはあった？」
　大きな物を購入した形跡はない。リュックにアクセサリの一つでも入っているかもしれないと思ったが、卯月ちゃんは左右の人差し指を合わせて苦笑いした。いちいち可愛い。
「すごく可愛い春っぽいワンピースがあったんですけど、ちょっとお値段が……」
「そういえば、卯月ちゃんって、あんまりワンピースって着ないよね。いや、私服は知らないけど」
「あんまりないです。サイズもぴったりだったし、ピピッて来たんですけどね」
　ピピッて来たのか。それは是非見てみたいと思い、後から考えると信じがたい一言を口走った。
「それはそのワンピースを着た卯月ちゃんを是非見てみたいな。お店は遠いの？」
「いえ、すぐそこです。でも、さっき試着したばっかりで戻ったら変じゃないですか？」
「すごく迷ってる感」
「なるほど。じゃあ、行きますか？」
　神よ！
　俺は思わず叫びそうになってぐっと堪えた。二つ返事で頷いて、卯月ちゃんと並んで歩き出す。
　ずっとずっと大好きで、毎日毎日ＣＤを聴いて写真を眺めている卯月ちゃんと、二人で歩いている。俺が心の中で号泣しながら打ち震えている隣で、卯月ちゃんはまるで友達といるかのように、普通に話しかけてきた。
「普段は制服だから、私服ってせっかく買っても意外と着ないんですよね」
「あー、なるほどね。１シーズンで週末が何回あるかっていう」

「そうそう。外に出ない時なんて、ジャージでごろごろしてるし」
「卯月ちゃんは、いつもオシャレしてるイメージがあるけど」
「そんなことないです。でも今日、油断しちゃダメだって思いました」
「いや、俺の方こそ、こんな格好で卯月ちゃんの隣を歩いて、なんだか申し訳ない感じ」
「えー、別に悪くないですよ？　ライブの時よりオシャレじゃないですか」
「ライブはもみくちゃになるから、ガチ戦闘モードっていうか」
「なるほど。じゃあ私も、非戦闘モードの〇〇さんが見られて嬉しいです」
　俺は溶けそうになった。
　大胆に誘っておきながら、会話が途切れたらどうしようと心配していたが、まったく無用の心配だった。
「〇〇さんは、この辺りにはよく来るんですか？」
「よくってほどでもないけど、乗り換えがここだから、今日みたいな感じでふらっとすることはあるかな。卯月ちゃんは？」
「私はよく来ますね。家が世田谷だから、近いし、お買い物は大抵ここです」
「世田谷の高級住宅街？」
「たぶんそういうのじゃないです」
　あっけらかんと笑う。ちなみに、何気なく口にした「家が世田谷区」という情報は、俺の記憶では初出のはずである。それをさらりと言うということは、知っている人は知っていることなのだろうか。
　ひょっとしたら失言かもしれないので、それ以上は突っ込まずに話題を変えた。
「凛ちゃんや未央ちゃんとは、プライベートでも遊ぶの？」
「未央ちゃんは遠いからそうでもないけど、凛ちゃんとは時々会います」
「凛ちゃんって、花屋さんなんだっけ？」
「そうです。〇〇さん、凛ちゃんにはお手紙出してないんですか？」
「卯月ちゃんだけだよ」

「〇〇さん、ライブでもずーっと私を見てますよね。嬉しいですけど、たまには凛ちゃんと未央ちゃんも見てくださいね。時々決めポーズを入れ替えたりとか、色々やってるんですよ？」
楽しそうに笑う。正直凛ちゃんと未央ちゃんには興味がなかったが、卯月ちゃんがそう言うのであれば、今度しっかり見てみようと思った。そういうのも手紙に書けたらと思う。
そんな他愛もない話をしている内に、ショップの入っているビルに着き、エスカレーターに乗った。俺はこういう女性向けの店が並ぶ空間に来たのは初めてで、思わずキョドってきょろきょろしていると、卯月ちゃんがいたずらっぽい目をして顔を近付けてきた。
「〇〇さん、こういうところは来ないんですか？」
過去に一番近い距離ではなかろうか。俺はドキドキしながら首を振った。
「まさか。男が一人で来る場所じゃない」
「いい人はいないんですか？」
「卯月ちゃんにしか興味がないよ」
思わずそう言ってから、今のはドン引きの台詞だったと激しく後悔した。明らかにアイドルを現実の女性と同じフィールドで見ているとバレる発言だったが、卯月ちゃんは惚れ惚れするスルースキルを発揮してエスカレーターをトンと降りた。
「ここです」
卯月ちゃんがバスガイドのように手を上げた先に、聞いたこともないブランド名のショップがあった。マイナーなのか、自分が無知なのかもわからない。
店に入ると、店員のおねーさんが卯月ちゃんを見て、それから俺を見て合点いったように頷いた。卯月ちゃんは気が付いていないようだが、一度一人で来て諦めた店に、男を連れてくるということは、つまりそういうことだろう。店員さんがそう考えるのは自然だし、できれば俺もそうしたいと思っていた。
俺には会釈だけして、店員さんが卯月ちゃんに歩み寄る。卯月ちゃんは明るい色のワンピースを手にして、「もう一度着てみてもいいで

すか？」と笑った。
「もちろん。私も大概お世辞も言いますけど、こんなにも本心から、このワンピースはお客さんのために作られたんだって思ったのは初めてですよ」
「なるほど。上手なお世辞ですね」
「お世辞じゃないから！」
フランクな会話をしながら、卯月ちゃんが試着室に入る。
考えれみれば、たまたま街で会っただけのファンのために、わざわざ店に戻って試着して見せてくれるというのは、一体どういうことだろう。卯月ちゃん自身も、少なからず俺に買ってもらえることを期待しているのだろうか。
店員さんが試着室の前で突っ立っている俺に近付いてきた。
「絶対に似合いますから」
「彼女、ここにはよく来るんですか？」
「去年の秋以来かな」
「よく覚えてますね」
「もちろん」
店員さんが得意げに笑った。
試着室の中から着替えをする音が聞こえる。今この薄い布一枚の向こうで、卯月ちゃんが下着姿になっているのかと思ったら、思わず全身が熱くなった。すぐ隣に店員さんがいるので、色々と堪える。
やがてカーテンが開いて――そこには天使が立っていた。もはや可愛いという形容詞で言い表せるレベルではない。
俺はピッと卯月ちゃんを指差しながら、店員さんを見て言った。
「じゃあ、これください」
「はい。ありがとうございます」
一瞬の間があって、卯月ちゃんが慌てて手を振った。
「いえいえいえいえ！　それはダメです！」
「そのワンピースは卯月ちゃんのために作られたんだよ」
「それ、さっき聞きました！　そういうつもりで来たわけじゃないですから！」

本気で慌てたように卯月ちゃんがそう言って、俺は若干の違和感を覚えた。本当にそういうつもりだったのではないのなら、なぜ一ファンのために、わざわざここまで来て試着してくれたのだろう。
「これ、そのまま着ていけますか？」
「はい、もちろんです。今日は温かいし、ちょうどいいですね」
「もうっ、聞いてますか、○○さん！」
「まあまあ。同じＣＤを１０枚買うより、ずっと有意義なお金の使い方だと思う」
そう言いながら、そういえばそのワンピースがいくらなのか知らないと思ったが、もうこの際いくらでもいいと思い直した。
「俺は、卯月ちゃんにそのワンピースを買ってあげるために生まれてきたんだって、今わかった」
真顔でそう言うと、卯月ちゃんは少しだけ照れたように俺を睨んだ。
「そういうの、よくペラペラ言えますね。慣れてるんですか？」
「緊張で死にそう」
結局うやむやのままレジへ。卯月ちゃんもこれ以上引き止めると空気が悪くなると感じたのか、もう何も言わなかった。
なお、２万８千円だった。なんとなくクレジットカードを作ったあの日は、今日ここに繋がっていたのだと、俺は思った。これで手持ちが足りなかったら、いい恥さらしだった。
購入したワンピースに、先ほどまで着ていたカーディガンを羽織る。リュックは少し似合っていないが仕方ない。
着ていた服は、綺麗にたたまれてお店の紙袋に納められた。店員さんが俺に渡してきたので、なんとなくそのまま俺が持っている。この中にまだ卯月ちゃんの温もりの残る服が入っているかと思うと、それだけで興奮した。隙をついて嗅ぎたい。
先にエスカレーターに乗ると、１段後ろで卯月ちゃんが言った。
「絶対にお礼をしますからね！」
振り向くと、本当にすぐ目の前に卯月ちゃんの胸の膨らみがあって、俺は思わず仰け反った。その勢いで背中から落っこちそうにな

り、反射的に卯月ちゃんの腕を掴んで体勢を立て直すと、顔がむにょっと胸に埋まった。その柔らかさに頭の中が真っ白になる。
恐る恐る目だけで見上げると、卯月ちゃんがぽかんと口を開けていた。
「結構大胆なことしますね」
「ごめんなさい」
「いえ、今落ちそうになったのはわかったので大丈夫です。あっ、それで、お礼をするっていう話です」
並んでビルから出て、卯月ちゃんが隣で俺を見上げた。先ほど胸に顔を埋めた件は不問にしてもらえたようだ。
お礼ということだが、今のおっぱいの感触だけでもう十分すぎたが、そんなことを言ったら本当に終わってしまうのでやめた。
「じゃあ、せっかく買ったし、その服を着た卯月ちゃんの写真が欲しいな」
それなりに勇気を出してそう言うと、卯月ちゃんはうーんと首をひねった。
「そんなのでいいんですか？　ちょっと割が合わない気がします」
「じゃあその後で、卯月ちゃんのオススメのカフェを紹介してよ。ケーキを奢るよ」
「私が出します。じゃあ、公園に行きましょう。お花が咲いてる綺麗な公園があるんですよ！」
そう言うと、卯月ちゃんは道の先を指差して明るく笑った。本当に笑顔の可愛い子だと思う。

2

繁華街からはずれると、人気がぐっと少なくなった。春の日差しを浴びながら二人並んで歩いていると、まるでデートのようだ。

もちろん、これは何か歯車が噛み合って起きた奇跡の一幕に過ぎないのであり、多くを求めてはいけないことはわかっている。この一瞬がずっと続けばいいのにと思ったら、逆に確実に訪れる終わりを意識して寂しくなった。

小さくため息をつくと、卯月ちゃんが心配そうな目で俺を見た。

「どうかしましたか？」

「いや。今日が幸せすぎて、ちょっと怖くなった」

「楽しいですよね。お天気もいいし、私も退屈してたから、〇〇さんに声をかけてもらえて良かったです。気に入った服も買ってもらえたし！」

いたずらっぽく卯月ちゃんが笑う。本当に、実に自然に相手が喜ぶことを言う子だ。それとも、すべて計算してやっているのだろうか。そういう子には見えないが、女の子はよくわからない。

やがて到着した公園は、デートスポット的なものではなく、近くの人たちが散歩をする類の公園だった。子供たちがわいわい遊んでいる。奥のグラウンドでは草野球しているおじさんたちがいて、賑やかだった。

ランニングコースの内側に花壇があって、色とりどりの花が咲いていた。

「元々凛ちゃんに教えてもらったんです。あっ、ラナンキュラス」

卯月ちゃんがそう言って、花壇の傍でしゃがんで覗き込む。生憎花はまったく詳しくないので、どれがラナンキュラスかはわからなかった。

「写真、本当にいいの？」

「はい。あっ、でも、外に出しちゃダメですよ？」

「それはもちろん！　むしろ、頼まれても見せたくない」

今のも独占欲剥き出しの台詞で、引かれたかなと思ったが、やはり卯月ちゃんはにっこり笑っただけだった。
「本当に大事なものって、逆に人に教えたりしたくないことって、ありますよね」
「ああ、そういう感じ」
今日は何回、卯月ちゃんの気遣いに助けられているのだろう。
それにしても、自分の写真を「本当に大事なもの」と表現するのは、恥ずかしくないのだろうか。その辺りは卯月ちゃんもアイドルなので、少なからず自分に自信があるのだろう。
スマホを取り出すと、カメラアプリを起動した。画像サイズを最大にして、画質も最高にする。ちゃんとしたカメラが欲しいが、最近はスマホのカメラでも綺麗に撮れるので大丈夫だろう。それよりも、イージーミスでこの奇跡の成果物を台無しにしないことが大切だ。
ドキドキしながら何枚か撮ってみた。自分のカメラフォルダに、卯月ちゃんの写真が収められていく。もう夢か現実かわからなくなってきた。
卯月ちゃんは花壇をぷらぷら歩きながら、時々ポーズを取ったり、花に手を添えたりする。仕事の撮影もこんな感じなのだろうか。それはわからないが、やっぱり卯月ちゃんもプロなんだなと改めて思った。
時々撮った写真を見ながら、こう撮るともっといいと教えてくれた。その通りに撮ると、確かに卯月ちゃんの可愛さがさらに引き立てられた。どこまで近付いていいのかわからず、撮るのをためらっていたアップの写真も何枚も撮れた。
二人で並んでベンチに座ると、卯月ちゃんがスマホを覗き込んだ。写真フォルダを見ると、数えきれないほどの写真が並んでいて、卯月ちゃんが呆れた顔をした。
「〇〇さん、私が思ってる以上に私のこと好きなんですね」
「ああ、うん。大好きだよ」
またさらっと流してくれるかと思ったら、卯月ちゃんは隣でじっと俺の顔を見つめ、俺は恥ずかしくなって俯いた。

「それは予想外の反応なんだけど」
「いえ、面と向かって好きって言われると、思ったより恥ずかしくなって」
「先に卯月ちゃんが言ったんだけど」
「そうですよね。ちょっと私、自惚れ屋さんでしたね」
夕方に近い。最初に声をかけてから、もう2時間くらい経っているのではないだろうか。
この幸せな時間が、こんなにも長く続くとは思わなかった。挨拶して30秒くらいで終わるはずだった。
「今日の記念に、ツーショット写真、撮ったらダメ？」
それは、本当にすべてを捨てる覚悟の提案だった。今日のすべてにおいて、卯月ちゃんを本気で困らせたら最後だと思っている。卯月ちゃんが嫌がることだけはしてはいけない。
いくら外に出さない約束をしても、男と二人のツーショット写真をアイドルの子が撮るのが許されるはずがない。それをわかっていて、どうしても抑えられなかった。
心臓が飛び出しそうだった。顔を上げることもできず、ぐっと拳を握ると、頭上から聞こえたのは予想とは裏腹の、卯月ちゃんの軽い返事だった。
「あっ、それいいですね！　撮りましょう！」
顔を上げて隣を見ると、卯月ちゃんがずいっと身を乗り出してきた。肩が触れ合い、その温もりに顔が熱くなる。
「よく友達と一緒に撮ったりするんですよ」
「あっ、と……えっと……」
スマホを取り出すが、提案しておきながら撮ったことがなく、どうしていいのかわからない。普通に考えれば、スマホのカメラを切り替えるのだが、頭の中が真っ白になってテンパってしまった。
そんな俺の様子を見かねてか、卯月ちゃんが自分のスマホを取り出した。
「いいですよ。私が撮りますね！　結構上手ですよ？」
そう言うと、卯月ちゃんは慣れた手つきでカメラを起動して、俺と

反対側の手で持って肘を伸ばした。そして俺の肩に頭を乗せて、ピースをする。
突然のことで、俺はもう何がなんだかわからなくなった。右肩に感じる卯月ちゃんの頭の重み。腕の柔らかさ。そして、髪の毛からする甘い香り。
「〇〇さんもピースしてください」
「ああ、うん」
思わず右手を上げたら、卯月ちゃんの横っ腹に肘が当たって置き場に困った。背中に手を回して、そっと肩を引き寄せる。首を右に傾けて、卯月ちゃんの髪に頬を当てた。左手でピースする。
カシャっと一枚。そのままの姿勢で写真を確認して、卯月ちゃんはもう一度手を伸ばした。
「〇〇さん、笑顔がぎこちないです」
「笑顔って難しくない？」
「私、得意です」
「知ってる」
「喋っていたら自然に笑えますか？　さっきまで普通でしたよ？」
「笑えって言われて笑うの、人生で初めてだ」
先ほどより強く卯月ちゃんを抱き寄せる。ピースした指を重ねてみたり、色々試した後、卯月ちゃんが言った。
「カメラ目線、やめてみましょうか」
そう言われて、二人で目を閉じてみた。撮った写真を二人で確認して、卯月ちゃんが思わず慌てた声を出す。
「これ、やばいですね」
「もらえたら一生の宝物にする」
肩を抱き寄せられて、俺の胸の中で微笑みながら目を閉じている卯月ちゃん。そんな卯月ちゃんに頬を寄せる俺。完全にカップルのそれだった。
卯月ちゃんはしばらく俺の胸にもたれたまま、じっとその写真を見つめていた。俺はどうしていいのかわからず、右腕で卯月ちゃんの細い肩を引き寄せると、左手でそっと髪を撫でた。

卯月ちゃんがアプリを落として、体の力を抜いて俺にもたれてきた。体勢を変えて、両腕で卯月ちゃんの体を包み込む。ただただ柔らかくて、少し熱くて、髪の毛からいい匂いがして、もう死んでもいいと思った。

腕が窮屈だったので、右腕だけ少し下げると、もろに胸部を抱きしめる形になった。少し考えればわかったことだが、思い至らなかった。これはもう、完全に胸を触りに行ったようなものだ。

開き直ってそのままぎゅっと抱きしめる。自分の腕に押し潰される卯月ちゃんのおっぱいの弾力。卯月ちゃんは目を閉じたまま、眠っているように俺の腕に体を預けている。

左胸が痛いくらい強く打っていた。きっと卯月ちゃんの背中に伝わっているだろうなと思うと、恥ずかしくて泣きたくなった。

街の公園で何をしてるんだろうと、一瞬意識が外を向き、すぐに全神経を腕の中の女の子に集中させた。よく街でイチャイチャしているカップルがいるが、きっとこんなふうに、自分たち以外のことには意識が向いていないのだろう。

右腕を動かすと、その柔らかさがダイレクトに伝わってきた。そっと手の平で卯月ちゃんの左胸を撫でると、さすがにやりすぎたか、卯月ちゃんはそっと俺から体を離して元の位置に戻った。

「あっ……」

狼狽する俺をちらっと見て、卯月ちゃんは蠱惑の笑みを浮かべた。

「〇〇さん、すっごくドキドキしてましたよ？」

街にいた時、あんなにも子供っぽい仕草をしていた子が、今はこんなにも挑発的な目で俺を見つめている。やっぱり女は怖いと思った。

「緊張して死ぬかと思った」

「本当かなぁ。あっ、写真送りますね」

つい今まで、俺の胸の中で安らいでいたのが嘘のように、いつもの明るい表情に戻って卯月ちゃんが言った。胸を触ったこともまったく気にしていないように見える。

一体卯月ちゃんは何を考えているのだろう。それを少しでも推測したかったが、次の一言に全部飛んでしまった。

「〇〇さん、ＬＩＮＥってやってますか？」
「ＬＩＮＥ？　やってるけど」
「じゃあ、それで送りますね」
　なんでもないことのようにそう言って、卯月ちゃんが画面にＱＲコードを表示させた。
　俺はもう抜け殻のようになって、言われるままＱＲコードにカメラを向けた。
「あっ、ついでに私の写真もください。全部はいいので、〇〇さんが特に気に入ったのを数枚」
「卯月ちゃんが選んでくれていいよ」
「いえ、〇〇さんの趣味が知りたいので」
「怖いことを言うね。試されてる？」
「はい」
　自分のＬＩＮＥに卯月ちゃんの名前が現れる。本当に、あの島村卯月の個人的なＬＩＮＥをゲットしたのかと思うと、もうわけがわからなくなった。ひょっとしたら、写真を送り合った後、ブロックされるのかもしれないが、卯月ちゃんがそんなことをするとも思えない。
「これ、改めて見ると、本当に照れますね」
　はにかみながら、卯月ちゃんがツーショットの写真を送信してくれる。撮った写真すべて。もちろん、最後に撮った目を閉じているヤツもだ。
　自分のスマホで見ると、完全に恋人同士だった。現像して額に飾りたい。
「俺、きっと今日のために生まれてきたんだな。もう死んでもいい」
「死なないでください。あっ、私の写真は後からでいいので、〇〇さんが可愛いと思うのを選んで送ってくださいね」
　うーんと一度伸びをして、卯月ちゃんがベンチから立ち上がった。日はもう暮れかけていて、西日が卯月ちゃんの横顔を赤く染める。
　俺も腰を上げる。腕にまだ卯月ちゃんの温もりが残っている。しかしそれも、すぐに消えてしまうのだろう。目の前にいる大好きな女の子を、思い切り抱きしめたい衝動に駆られたが、それは絶対にして

はいけないことだと思い、我慢した。
勘違いしてはいけない。この写真も、抱きしめたのも、本当に色々な偶然が重なった結果に過ぎないのだ。
今日という日を俺の人生で最高の日にするためには、綺麗に終わらせなくてはいけない。ごねず、渋らず、引き止めず、すっと別れよう。
「今日は本当にありがとう。すごく楽しかった」
俺がそう言おうと思って息を吸い込むと、先に卯月ちゃんが笑って言った。
「じゃあ、ケーキを食べに行きましょうか」
俺は口を開けたまま、何も言えずにコクコクと二度頷いた。

3

繁華街に戻ると、すっかり夜の色になっていた。街灯やショップの灯りでキラキラしている。

この街はこんなにも綺麗だったろうか。隣に卯月ちゃんがいるだけで、何もかもが違って見える。

またキザな台詞かもしれないと思いながらも、それをそのまま口にしてみた。

「隣に誰がいるかで、街が全然違って見えるよ」

「私もそれ、思いました。男の人と歩いたことなんてなかったから、いつもなら絶対に気にしないお店とかが気になったりします」

「メンズ？」

「とか。今度〇〇さんをコーディネートしましょうか？」

「それは是非お願いしたい」

「でも私、男の人の服なんて全然わかりませんけどね」

カフェへの道中も、卯月ちゃんはずっと楽しそうに喋り続けていた。俺はそれよりも、今卯月ちゃんの言った「今度」が気になってしょうがなかったが、社交辞令として受け流した。

こんな幸せな日がまた訪れるとは思えない。それとも、教えてもらったＬＩＮＥで、気軽に話しかけてもいいのだろうか。

いや、そこは空気を読むべきだ。ひとまずその葛藤は家に帰ってからすることにして、目の前の女の子に集中する。

「卯月ちゃんが男と歩いたことがないっていうのが信じられない」

「本当ですよ」

「学校でもモテるでしょ」

「私、△△高だから。お友達も女の子しかいません」

さらっと、卯月ちゃんが通っている高校の名前を口にした。ちなみに、有名な女子校だった。

実家の場所といい、ぽんぽん個人情報を出してくれる卯月ちゃんに、逆に不安を覚えた。しかし、やはり失言の可能性も考え、意識し

ている様子は見せないようにした。
「そうなんだ。今日、全然緊張してる感じがないから、慣れてるのかと思った。緊張しっぱなしの俺とは大違いだ」
「私には、〇〇さんこそ慣れてるように見えますけど」
「生まれて初めて女の子と喋った」
「本当かなぁ。すっごく自然に2回もセクハラされました」
いきなり爆弾を投下してきて、俺は思わず噴いた。
もちろん、1回目はエスカレーターの件として、2回目は公園で胸を触ったことだろう。気付いているとは思っていたが、こうして改めて言うということは、それなりに意識しているのだろう。それがなんだか嬉しかった。
「理性の限界でした。ごめんなさい」
「いいですよ。私も気持ち良く寝てたので、お互い様です」
あっけらかんとそう言って笑う。
「気持ち良かったんだ」
思わず呟くと、珍しく卯月ちゃんが慌てた素振りをして、ぷいっとそっぽを向いた。
「もうっ。そこは聞き流すところです」
「あまりにも嬉しくて、つい」
それからは取り留めもない話をして、やがて卯月ちゃんオススメのカフェに辿り着いた。確かにカフェだが、バーのような雰囲気もある。レストランにも使えそうだ。
なんとか席は空いていて、奥の二人用のテーブルに案内された。
せっかくなので食事をしようと、ケーキの前にパスタを注文する。
他愛もない話をしていると、ふと話がデビューの頃の話題になった。俺は初めての握手会のことを聞いてみた。
「初めての握手会の時、卯月ちゃん、俺の名前を言い当てたの、覚えてる？　あれ、俺はすごく嬉しかったんだけど、間違えたらどうしようって思わなかった？」
もうだいぶ前のことだ。「覚えてません」と言われたらどうしようかと思ったが、卯月ちゃんはちゃんと覚えていてくれた。

「あれは私もドキドキしてました。〇〇さんから名乗ってくれたら良かったのに」
「なんか偉そうじゃん。お前、俺の名前覚えてるよな、みたいで」
「そうかもしれませんけど。でも、〇〇さん『いつも』って言ってたから。あの時、2通以上お返事を書いたの、〇〇さんしかいなかったんです」
「そうなの？　てっきり、ファンレターとかいっぱいもらってるんだと思った」
「今は増えましたけど、あの頃はデビューした時に3通くらいかな。みんなに返事を書いたんですけど、次に来た時に、『あー、この人は本当に私のファンなんだな』って思えたのは、〇〇さんだけでした」
「他の人はどんな内容だったの？」
「デビューしたての子になら、誰にでも通じそうな内容でした。〇〇さんだけですよ。足に巻いてたリボン、養成所の時は腕に巻いてたよねとか書いてきたの」
「完全にストーカーだな」
「でも嬉しかったです。最初のライブからずっと来てくれてたのも知ってたから、それが〇〇さんだってわかって、あの日は私、なんだかとっても嬉しかったんです」
　そう言って、卯月ちゃんは懐かしむように目を細めた。俺はどぎまぎして思わず視線を落とした。
「だけど、今でも手書きの返事を書いてるってすごいよね。今はもう、ファンレターいっぱいもらうんでしょ？」
「そうですね」
　短くそう言葉を切って、卯月ちゃんはふっと視線を逸らせた。
　今日初めて、何か言いにくいことを隠したとわかった。逆に、これまでのすべては本音だったのだと確信できた。
　少しだけ沈黙があって、やっぱり隠し事は苦手なのか、卯月ちゃんは大きく息を吐いて顔を上げた。
「これは絶対に内緒ですけど、私今、手書きのお返事を出してるの、〇〇さんだけです」

「えっ……？」
「いっぱいもらうし、いっぱい書いてくれる人もいるし、〇〇さんみたいに顔と名前が一致する人もいます。でも、みんなに出してると切りがないし、みんなツイッターとかやってるから、そこで交流もできるし。どこからどんな情報が漏れるかわからないから、過度なファンサービスはやめるように、事務所からも言われてるんです」
「俺にはいいの？」
「事務所的にはあんまり嬉しくないと思うけど、手紙は私に届けてくれるし、いいんじゃないですか？　本当にダメなら、たぶん〇〇さんのお手紙は、私に届いていないと思います」
「それは嫌だね」
「変な手紙も多いみたいなので、中を見られたりするのはどうしてもしょうがないんです。ごめんなさい」
　卯月ちゃんはそう言って大きくため息をついた。俺は慌てて手を振った。
「いやいや、別に卯月ちゃんが悪いんじゃないし。でも、俺にはくれるんだね」
「〇〇さんは特別だから」
「それは、ありがとう」
「デビューした時からファンでいてくれる人は、もうほとんどいません。有名になると古参のファンは離れていくって先輩から聞いたことがあったけど、本当だったんですね……」
「まあ、わからないでもない」
　俺がぽつりとそう言うと、卯月ちゃんが怯えたような顔をした。今日一日中笑顔だった卯月ちゃんに、初めて悲しそうな顔をさせてしまった。
「いや、俺はずっと卯月ちゃんのファンだから」
「やっぱり、ファンを辞めようって思ったこと、ありますか？」
「まあ、好き嫌いだから、辞めたくて辞めるものでもないけど、報われないなって思うことはしょっちゅうだよ。卯月ちゃんからもらった手紙に何度励まされたか」

「距離感は……ありますよね。そのためにツイッターとかやってるのに、○○さん、フォローしてくれないし」
「ああ、ツイッターはやってなくて」
さらっとそう言うと、卯月ちゃんが顔から微笑みを消して、心を見透かすように真っ直ぐ俺の目を見つめた。それから少しだけ言いあぐねて、唇を内側にすぼめてから、視線を落とした。
「そうですか」
背筋がぞくっとした。俺がアカウントを持っていることを、卯月ちゃんは知っている。瞬間的にそう察知した。
「あっ、やってないっていうか、やってるんだけど、アイドルの話はしてなくて」
卯月ちゃんはちらっと顔を上げて、それから申し訳なさそうに頭を下げた。
「ごめんなさい。試すようなことを言って。私、○○さんのアカウント、知ってるんです。ずっと前から。でも、ライブの後でも全然そういう話をしていなくて、手紙で読むほど私に興味がないのかなって、ちょっと不安になったりしてました」
俺は混乱した。本当に一切アイドルの話を書いていないアカウントを、どうして卯月ちゃんは知っているのだろう。そう聞くと、卯月ちゃんは慌てたように左右を見てから、恥ずかしそうに俯いた。
「手紙に書いてあったことを検索したりして……。ス、ストーカーっぽいですね。ごめんなさい」
まだまだファンもずっと少なかった頃、手紙をくれる人がどんな人が気になって、検索したりしていたらしい。卯月ちゃんがまだアカウントを作る前のことである。
それで、手紙に書いた、行った場所ややった内容から、俺のアカウントを発見した。それから時々見ているというから、俺は恥ずかしくて逃げ出したくなった。鍵リストで卯月ちゃんをこっそり見ていたが、まさか自分が見られているとは思わなかった。
運ばれてきたパスタを取り分けてつつきながら、卯月ちゃんが言った。

「でも安心しました。〇〇さん、私が思ってたよりもっといい人で」
「服のことは気にしないで」
「そこじゃないです。話しやすいし、一緒にいて楽しいです」
「俺も。卯月ちゃんの話面白いし、隣にいて落ち着く感じ」
「ありがとうございます」
　恥ずかしそうにはにかんで、卯月ちゃんはフォークに巻いたパスタを口に運んだ。
　本当に、初めはただ好みの女の子だというだけで好きになった。それが、知れば知るほどどんどん好きになっていく。
　丁寧な言葉遣い。ふとした仕種。手紙をくれる優しさ。女の子女の子した丸い文字。それに今日一緒にいて、気遣いも出来るし、空気も読めるし、押すところと引くところをわきまえているのもわかった。
「卯月ちゃん、好きだよ」
　真っ直ぐ見つめてそう言うと、卯月ちゃんは思わずフォークを落としそうになってから、目を丸くして俯いた。
「は、恥ずかしいじゃないですか！」
「何度も言っておこうと思って」
「〇〇さん、手紙でも『可愛い』ってたくさん書いてくれるけど、『好きだ』なんて書いてませんよ？　少し内気な人なのかなって思ったら、ぐいぐい来ますね」
「自分でも驚いてる」
「私はもっと驚いてますから！」
　顔を赤くしてそう言って、二人で笑った。
　温かな時間が、どうしようもなく幸せだった。

4

すっかり話し込んで、店を出たらもう２０時を回っていた。２時間くらいカフェにいたことを知って二人で驚く。

どれだけ相性が合うのだろう。一瞬そう思ったが、それはたぶん勘違いで、卯月ちゃんの人柄だろう。きっと誰とでも話を弾ませることができる子なのだ。

街は相変わらずの人混みだが、今度こそもう、この幸せな時間を終わらせなくてはいけない。高校生の女の子を引きとめておく限界だ。

綺麗に終わらなくてはいけない。何度もそう心で念じながら、いよいよ別れを切り出そうとした瞬間、卯月ちゃんが振り返って明るい笑顔を見せた。

「〇〇さん、まだ時間大丈夫ですか？」

「あっ、全然平気」

「じゃあ、少し歩きませんか？」

俺の返事を待たずに、卯月ちゃんが歩き出す。隣に並ぶと、卯月ちゃんは一度俺を見上げて、柔らかく微笑んだ。

さすがに喋り疲れたのか、一言も話さない。それでも、気まずくなる沈黙ではなかった。

やがて卯月ちゃんは、木々と人工物の調和した広場にやってきた。暗いが暗すぎず、閑散としているが往来はある。適度な間隔に並べられたベンチにはカップルが一組ずつ座り、先ほどの自分たちのように、周囲のことなどまるで気にしていないように自分たちの世界に浸っていた。

卯月ちゃんは空いていた適当なベンチまで歩くと、腰を下ろして深く息を吐いた。

「さすがに疲れましたね。たくさん歩きました」

「うん」

俺がわずかな隙間を空けて隣に座ると、卯月ちゃんは少しだけお尻を浮かせてその距離をゼロにした。

日中は暑かったが、夜は肌寒い。触れ合う腕が熱を帯びた。
何も言わずに、卯月ちゃんがそっと俺の肩に頭を乗せた。俺はまったくどうしていいのかわからず、全力で考える。
ここまでがすべて、買った服のお礼なのだろうか。しかし、俺がこれを望んでいるのだと考えているとしたら、それはいくらなんでも俺のことをバカにしている。
恐らくそうではなくて、単純に卯月ちゃんがこうしたいからしているのだろう。しかし、それはなぜだろう。
今日、ひょっとしてそうなのかもしれないと思いながら、敢えて考えないようにしていたこと。わざわざツイッターを検索したり、手書きの返事をくれたり、俺の腕の中で安らいだり、こうして寄りかかったり。
卯月ちゃんは、俺のことが好きなのだろうか。
いや、違う。
言葉にしてみたら、どう考えてもそれは自惚れだった。自分の願望が強く入り過ぎている。きっと、ちょっと年上の男の人に甘えてみたい、それくらいのことなのだろう。
そっと肩を抱いて、髪を撫でてみた。卯月ちゃんはわずかにまぶたを開くと、もう少しだけ俺の方に体を傾けて、背中に手を回した。
「頑張れば頑張るほどファンの人たちが離れて行って、どうしていいのかわからなくなったことがあったんです」
「さっきの話？」
「はい。新しいファンの人たちは、ツイッターを見ると、私以外の子にも同じように話しかけたり、別のアイドルの子のことで盛り上がったり。そういうの見て、すごく寂しくなったりして……」
「みんな、手広いよね」
「はい……。そんな中で、○○さんだけが、ずっと同じペースで手紙をくれて、周りのことなんてまったく気にしてないみたいに応援してくれて。私も○○さんのお手紙に、何度も何度も助けられました」
「そう言ってもらえると嬉しいよ」
じんと胸が熱くなって、そう言うのが精いっぱいだった。卯月ちゃ

んはくすっと笑って少しだけ顔を上げた。
「便箋、いつも違いますよね。私、○○さんが雑貨屋さんで可愛い便箋を探してるの想像して、楽しんでました。書くと意識しちゃうかなって思って、いつも書きたいのを我慢してたんですよ？」
「そういうところに気付いてくれると、すごく嬉しいよ」
卯月ちゃんの言う通り、便箋は意図的に毎回変えていた。想像するような雑貨屋ではないが、それでも可愛いのを選んでいる。
なんだか胸がいっぱいになって、もう一度卯月ちゃんをしっかりと抱きしめた。
さっきは背中越しだったが、今度は卯月ちゃんは少し身をよじって、正面から俺の肩に顔を埋めた。背中をぎゅっと引き寄せられて、全身が熱くなる。
触れ合う胸と胸、頬をくすぐる髪の毛、首元にかかる吐息。誰よりも愛する卯月ちゃんが、俺の買ったワンピースを着て、俺の腕の中にいる。
しっかりと抱きしめたまま、ずっと髪を撫でていた。卯月ちゃんは時々身をよじったり、熱っぽい息を吐きながら、やはりじっとしがみつくようにして俺の肩に顔を埋めている。
その内、息苦しくなったのか、卯月ちゃんが顔を上げて大きく息を吐いた。顔からほんの数センチのところで、卯月ちゃんの湿った唇が艶めかしく光る。
「卯月……」
そっと、その唇を塞いだ。溶けるほど柔らかくて、ひんやりとした唇の感触に、全身が打ち震えた。
卯月ちゃんが背中に回していた手を首にかけて、少しだけ顔を傾ける。しばらく唇同士を触れ合わせてから、舌を絡めた。
ねっとりとした液体感のある卯月ちゃんの舌。うっすら目を開けると、卯月ちゃんは柔らかくまぶたを閉じていた。無表情で舌を入れてくる。
奥の方まで舌を絡め合いながら、卯月ちゃんの背中や腋を、輪郭をなぞるように撫でた。卯月ちゃんが「ん……」と声を漏らしながら身

をよじる。鼻息が蒸れるほど熱い。口の中は卯月ちゃんの味でいっぱいだ。
「愛してるよ、卯月」
舌を吸うように舐めながら、息っぽい声でそう言うと、卯月ちゃんは熱い吐息を漏らしながら小さく頷いた。
顎が疲れるくらい長い時間そうして互いを感じ合ってから、そっと顔を離した。
目の前に潤んだ卯月ちゃんの瞳があって、俺の顔が映っている。
もう一度キスをした。周囲はどうなっているかわからないが、どういう目で見られようと、然るべき人に注意されなければどうでもいい。
唇をむさぼりながら、片方の手でそっと卯月ちゃんの胸に触れてみた。優しく揉んでみる。柔らかいというより、弾力を感じた。
卯月ちゃんが顔を離して、もう一度俺の肩に顔を埋める。背中をぎゅっと引き寄せられたので、同じように両腕でしっかりと抱きしめた。
ずっとこうしていたい。一晩中抱きしめていたい。1分1秒でも長く、卯月ちゃんの温もりを感じていたい。
触れ合う肌が汗ばむほど強く、腕が痺れるほど長く抱きしめ合ってから、そっと卯月ちゃんが体を離した。陶然とした表情で見つめ合うと、卯月ちゃんから目を閉じて、もう一度キスをしてくれた。
「そろそろ帰りましょうか」
言われるまま立ち上がって周囲を見ると、両隣のベンチには来た時と同じカップルが座って、やはり抱きしめ合っていた。まるで俺たちのことなど気にした様子もない。
そっと手を握ると、卯月ちゃんは一度俺を見上げてから、照れたように微笑んで、ぎゅっと握り返した。
何を言われるかと、期待と不安半々でいると、卯月ちゃんはもう甘ったるい空気はなく、昼間と同じ明るい声で世間話を始めた。
「そういえば、〇〇さんは、勉強はできる方ですか？」
「えっ？　あっ、どうだろう。どうして？」

「私、どうも勉強は苦手なんです。頑張ってるんですけど、頭が悪いんでしょうか」
「勉強ができない卯月ちゃんも、それはそれで可愛いよ」
斜め上の回答をしたからか、卯月ちゃんが不満げに俺を見上げた。
俺は慌てて取り繕う。
「いや、別にバカとかそういう話じゃなくて」
「そこじゃないです」
「どこ？」
「わかんないならいいです。ふんっだ」
わざとらしくそっぽを向くが、手はしっかり握ったままだった。それがなければ、さっきまで抱きしめ合ってキスをしていたのが嘘のように、いつも通りの明るい卯月ちゃんだった。
ちなみに、今の台詞のどこで機嫌を損ねたのか、まったくわからなかった。女の子は難しい。
ぐだぐだ話しながら駅に戻ってきた。今度こそ本当にお別れである。
手を離して、ずっと持っていた紙袋を渡した。
「服、本当にありがとうございました。大切にします」
卯月ちゃんは一度頭を下げて、真っ直ぐ俺を見上げた。真剣な眼差しで、いつもの微笑みはない。
「それから――」
一度言葉を切って、どうしようもなく動揺している俺に、明るい声で言った。
「今日はすごく楽しかったです。私も、○○さんのこと、大好きです」
初めて卯月ちゃんはそう言って、照れたように俯いた。次に顔を上げた時にはもういつもの笑顔で、いたずらっぽい目をしていた。
「今日は帰りますね。あっ、写真送ってくださいよ！」
「あっ、うん。俺の好みで厳選して送るよ」
「楽しみです。じゃあ、また遊んでください。さよなら」
明るく笑って手を振って、卯月ちゃんは改札を抜けて行った。
やがてその背中が消えてしまうまで見送って、夢の時間は終わっ

た。
果たして今日のすべては、本当にあったことなのだろうか。
電車に揺られながら、公園で撮った卯月ちゃんの写真を眺める。
フォルダに並んだ、たくさんの俺にだけ向けられた笑顔。いつも部屋で見ている、雑誌やインターネットのありふれた写真ではなく、素のままの卯月ちゃん。
アイドルなんて作られたもので、素の本人は不細工で性格も悪くて男もいて、なんてよく聞くが、素の卯月ちゃんは本当に笑顔が眩しくて、むしろ綺麗な衣装を着て歌っている時よりもキラキラしていた。
家に帰ったら写真を選んで送ろう。きっとそれが個人的にやりとりのできる最後の1回。ＬＩＮＥを教えてくれたからといって、気軽に送ってもいいかは別問題だ。
もっと仲良くなりたい。けれど、嫌われたくはない。嫌われるくらいなら、今日の幸せな思い出に浸りながら、今まで通りの距離でいた方がいい。
卯月ちゃんが大好きだと言ってくれた。抱きしめてキスをした。それ以上の幸せを望んだら、落としどころがわからない。
恋人同士になって、エッチして、結婚する？
言葉にすれば、飛躍しすぎなのがわかる。自重しなくてはいけない。
心の中の「もっと行けるはずだ」という声を無視して、自重と我慢を呪文のように唱えていると、ＬＩＮＥのメッセージが飛んできた。
卯月ちゃんからで、可愛いスタンプと一緒にこう書かれていた。
『帰りが遅いって怒られた……〉〈』
ドクンと、痛いほど強く胸が鳴った。
こんな日常的な話題を、何気なく送ってくれた。嬉しいよりも、その意味を考えてしまう。もっとも、自分にとって都合のいい解釈ばかりで、大した想像はできなかったけれど。
『難儀やな』
謝っても気まずくなるだけなので、軽い返事をする。そこで既読スルーされたら、ちょっとシンプルに返しすぎたか悩んでしまったが、

必要のない心配だった。
『信頼できる大人の男の人とずっと一緒にいたから大丈夫って言ったら、家族会議になりました』
思わず固まった俺を見透かすように、可愛いスタンプと一緒に一言。
『冗談です^^』
結局それから、悩んでいたのが嘘のように、ずっとＬＩＮＥでメッセージを投げ合いながら家に帰り、写真も厳選して送った。
送り終わると卯月ちゃんからコールがあって、やっぱり会話が弾んで遅くまで通話してしまった。
アプリを落とした後、すでに日も変わった部屋の中で今日一日を振り返る。
出会った最初から、服を見たいと言った俺のために、わざわざお店まで戻って試着してくれた。腕の中が気持ち良かったと言ってくれて、食事の後も自分から時間を引き延ばしてくれた。
抱きしめ合ってキスをして、それでも気まずくなることもなく、今もついさっきまで普通に通話していた。まだ耳に残る卯月ちゃんの声。
今日は2回、「次」をほのめかしてくれた。
『今度〇〇さんをコーディネートしましょうか？』
『また遊んでください』
文字通り受け取っていいのかわからない。その時は本心だったかもしれないけれど、一晩経ったら変わってしまうかもしれない。
今日はテンションが上がっていただけで、キスしたことも何もかも、後悔するかもしれない。なかったことにしようとするかもしれない。
だけど、「絶対に無理だ」「そんなはずはない」「自重しろ」「我慢が必要だ」などと弱気になってばかりでは、結果的に卯月ちゃんの気持ちを傷付けることになるかもしれない。
だから明日、朝、自分から「おはよう」と声をかけてみよう。
もしもそれに、卯月ちゃんが明るい返事をくれたら、無理に自分を

押し殺さず、自然のままに振る舞おう。
友達同士でもいい。ＬＩＮＥで日常的なメッセージを送り合える仲でも十分すぎる幸せだ。仲良くなりたい。
島村卯月――世界で一番大好きで、世界で一番大切な女の子。
彼女が求めてくれる限り、これからもずっと応援していきたい。
―　完　―